

優良技術者表彰 受賞者インタビュー

土木技術者の日頃の研究・研鑽を称え、技術者表彰規程に基づき、優良技術者の表彰を毎年行っています。今年度受賞された滝沢さんに工事のポイントや日々の業務について伺いました。

vol.2 株式会社安藤・間

滝沢 究さん (20号調布(2)共同溝他工事 安藤・間・若築特定建設工事共同企業体 調布共同溝作業所 所長)



受賞：20号調布(2)共同溝他工事

<主な工事内容>

国道20号直下における、
内径3.5m、延長5.4kmの共同溝を施工

1日に約4万台の交通量がある一般国道20号。その地下に電気・通信設備用の共同溝を掘削する同工事は、限られた作業用地を活かしながら、都心の大動脈ともいえる道路と近隣への影響を最小限に抑えたいという施工が求められていた。

きっかけはシンプル。

「モノづくりを通して役に立ちたい！」

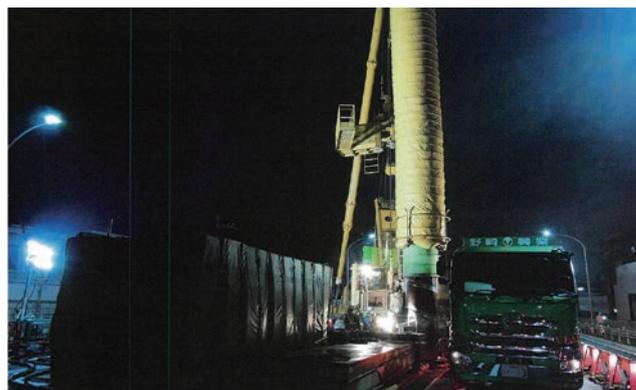
この仕事を目指したきっかけはとてもシンプルでした。「社会のために役に立ちたい」。そんな思いから、目に見える形で役に立っていることがわかるこの業界を自然と志すようになりました。進路を決める段階では、土木と建築の違いもわかっていないほど漠然としていましたが、さまざまな土木の現場で従事し経験を積むにつれて、竣工したときの達成感や充実感、重要な社会インフラの整備を担っているんだと責任感が強くなりました。いまではそれが毎日の仕事に対するモチベーションにもなっています。やりがいのある仕事に就くことができ本当に良かったと日々感じています。

自ら開発した技術を現場で使う

私自身は現場一筋というわけではなく、現場に配属された後、設計部門で技術開発などに携わっていました。そのなかで今回の工事のような都市土木と出会ったという経緯があります。技術開発をしていたときは主にシールドトンネルのセグメントの開発をしていました。たまたまですが、技術開発から



現場に戻るタイミングで、自分が開発していたセグメントを使用する工事を担当しました。現場ではそれまで開発していたこともあり、管理や取り扱いには予め準備ができていたので、大きなアドバンテージになりましたね。なにより、自分の開発した技術がインフラの一部として機能していることを確認できたのは、貴重な経験になりました。その場面に立ち会ったときは技術者として誇らしかったことを覚えています。



都市土木の宿命と昼夜格闘する日々

現場は交通量の多い道路直下ということもあり、地盤沈下や陥没など地上に影響が出ることは許されません。また、中間立坑は常設作業帯が設置できない道路中央に位置するため、夜間みの作業と、スケジュール管理にも気を遣いました。その他にも狭隘な作業基地での資機材の搬出入など、都市土木の「宿命」ともいえる諸課題をいかに乗り切り、対処していくかが工事の成否を握っていました。そのなかで、若手職員たちがそれぞれに熱意をもって取り組み、日々成長してくれたことが大きかったと思っています。そして、その頑張りが今回の受賞にもつながったと思います。ときには、シールドマシンがうまく前進しないなどの苦労もありましたが、我慢強く辛抱しながら「前進」していきました。今回の現場では特別な新技術を用いてはいませんが、「着実に、丁寧に、確実に」作業を行ったことも高品質な施工管理につながったと感じています。



休日は趣味でエンジョイ！

日常では味わえないスピード感を体感

時間を見つけて趣味のモータースポーツを楽しんでいます。サーキットでタイムを競うのですが、普段は数メートルずつしか前進しない現場にいる自分が、その何倍ものスピードで駆け抜ける自動車を運転しているのは不思議な感覚になりますね。ただでさえ日常生活では味わうことのできないスピード感をより「非日常」として味わうことができるのは他の人にはない特権かもしれません。

制限があるなかではありますが、趣味と仕事のメリハリをしっかりとつけて、楽しむときは思いっきり楽しむようにしています。



生活を支える「インフラ」をつくるという魅力

自分たちのつくったインフラで生活が便利になり、暮らしが豊かになっていくことを実感できる喜びは、今後工事のIT化や施工の自動化が進んでも変わらない魅力だと考えています。この魅力が若い世代にもしっかりと伝われば、人手不足といった問題も解決していくのではないかと思います。当面の目標はトンネルの無事完成なので、その喜びを仲間たちとわかちあえるようこれからも頑張っています。

